

心の復興に向かつて⑤ 東日本大震災復興事業の現実―その一

私の故郷・岩手県陸前高田市の事例――。震災前は二万二千人の人口で、日本創成会議が示したやうに将来は人口減少が予想される中、二万五千人が住める復興都市計画をしました。

壁にヒビが入るなどの公害が出てゐます。

掘削し、できた土地が高台移転地の一つとなりますが、一世帯あたりの土地造成費用は、一億円を優に超えることに。また、掘削された土砂は

気仙川を越えて隣の高田町まで運ぶため、「希望の架け橋」と呼ばれる巨大ベルトコンベアが二百億円建設されま

結果、まづ大規模すぎる高台移転工事が進みます。同市

手に向けて嵩上げされた土地は、主に商業地となるといふことで、震災前に高田町で店

岩神社が鎮まるこの山は、いざ掘削し始めると大きな岩盤であることがわかります。それを砕くため連日ダイナマイトが仕掛けられ、さらに予算は増大。近隣の民家は騒音や

を構へてゐた方々が、そこに店を構へようと必死に努力されてゐます。

しかし、いざ街ができてそこに多くの客を呼べる保証はありません。地方は車社会です。近隣地域には、すでに大きな駐車場を構へる大規模スーパーなどができましたが、そのスーパーですら現在

郊外からの集客に伸び悩み状態です。必ず人が集まる病院と学校も、中心商業地から離れた場所に建設されるのとこと。さらに盛土は切土より弱く、大きな地震や集中豪雨などにより、崩れず耐へられるかも心配です。

次々建設中の災害公営住宅も、稼働率が低いままで。その原因の一つは、高齢者が

高橋 知明

多いといふこともありすが、家賃が発生するため、収入の高低に関はらず、さまざまな理由でゐられるだけ仮設住宅にゐようとする人も多いたことが挙げられます。仮設住宅も国民の税金によって成り立ってゐますので、自立に向けて、早急に課題を解決しなければ、新築と言へど人が住まない家は傷みも進行し易いものです。

設棧橋が築かれてゐた当時、遠くは瀬戸内海からの船も着きました。巨大防潮堤はとも重いため、太いコンクリート支持杭が海岸線に数メートル間隔でひじょうに深く打ち込まれてゐます。これにより地下水脈が遮断され、山から里、そして海に注ぐ水の流れが破壊されます。

し、大規模工事の結果、大雨が降ると湾内は泥水で濁り、普段もコンクリートから出る石灰質の成分で、海はエメラルドグリーン色に。牡蠣などの養殖をする漁業者は、水揚げすると貝にへばり付いた白い泥を落とす作業を強ひられます。当然魚介類の味も落ちます。漁業者たちの多くは、かうした現状に危機感を覚えてゐることも事実ですが、さまざまな補助金などで生計を立ててゐるため、訴へることはしません。

◇ ◇

海岸線はどうか――。湾を囲むやうに建設中の高さ十二・五メートルにもなるコンクリート巨大防潮堤。これは今

までは存在しなかつた構造物で、災害復旧事業とは言い

たかはし・ともあき

こもれび

次々建設中の災害公営住宅も、稼働率が低いままで。その原因の一つは、高齢者が



たかはし・ともあき

公益財団法人 瓦礫を活かす森の長城プロジェクト事務局